

宗教指導者による
「平和、人間の尊厳、そして共有される責任」に関する対話

第4回東京和平プロセス

2026年10月13日～14日

声明文（仮訳）

私たち、宗教指導者および多様な信仰伝統の代表者たちは、2026年10月13、14日、東京和平プロセスのもと開催される、宗教指導者による「平和、人間の尊厳、そして共有される責任」に関する対話のために東京に集いました。

私たちは、それぞれ異なる背景、宗教伝統、共同体から参集し、その中には、今なお続く紛争によって深刻な影響を受けている地域から来た人々もいます。私たちは、自分たちの家族や共同体が直面する状況について、それぞれ異なる経験や視点を持ち、また、異なる認識を携えています。それでも私たちは集まり、深い意見の相違がある中でも、平和を追求する特別な責任を担う宗教指導者にとって、対話は依然として不可欠な課題であるという確信を共有しました。

私たちは、ウクライナとロシア、中東、ハイチ、ミャンマー、スーダンなど、世界各地の紛争地域で人々が直面している苦しみに深く心を痛めています。それらの地域の多くでは、私たちが前回の「第3回東京和平プロセス」で集って以来、さらに事態が悪化しています。

私たちは、断固として、そして声を一つにして次のことを宣言します。侵略戦争は決して容認できません。私たちは、政治指導者に対し、武器を下ろし、直ちに交渉の席に戻り、これらの恐ろしい紛争に終止符を打つよう強く求めます。

私たちが共有する道徳的責任

私たちの宗教伝統は、人間の尊厳が計り知れない価値を持つこと、そして不正義に立ち向かい、命を大切にすることの重要性を共に認めています。したがって、私たちは、自らの精神的・宗教的価値観を活かして、人間の尊厳への敬意を促し、民間人に対する暴力に反対するという決意を改めて表明します。また宗教の悪用や、宗教を武器として使用することをやめさせ、むしろ宗教を、人々の間に信頼を築くために用いることを目指します。さらに、公正で持続可能な平和に必要な環境を整えるため、平和的な対話と関わりを奨励していきます。

私たちは、人間の尊厳は、国籍、民族、宗教、政治的立場、あるいはその他のいかなる違いによっても、条件付きで認められるものではないことを、改めて確認します。ある共同体が苦しんでいるからといって、他の共同体の苦しみに対して無関心であってはなりません。

私たちが認識していること

平和を実現するためには、信頼と対話を取り戻すことが不可欠です。私たちは、信頼と対話を維持することの難しさ、そして対話を回復するために継続的に取り組んでいくことの必要性を認識しています。また、道徳的・宗教的な言説には、私たち自身の限界を乗り越え、共同体の人々がとる行動や、何が正当と認められるか、さらには何が可能であるかという境界線を形づくる力があることも認識しています。

「東京和平プロセス」をさらに前進させるために

東京での議論と振り返りを踏まえ、私たちは、対話を継続的な取り組みへとつなげていくことの重要性を認識してします。

相互のつながりと意思疎通の手段を維持する：私たちは、緊張が高まる状況下であっても対話を継続するための実践的な方法に取り組み、相互理解を深め和解を促進するための「架け橋」を築く努力を続けていくことを誓います。

紛争の影響を受けている地域における対話の推進：私たちは、自らの共同体内での対話を進め、紛争に関する相互理解を促すとともに、宗教間対話を通じて異なる共同体間の対話も促進し、公正な平和の実現に向けた行動を推進することを誓います。

女性と若者の役割強化：私たちは、和平プロセスの取り組みに女性や若者がより多く参画できる機会を模索し、その実現に向けて働きかけていくことを誓います。

宗教指導者として、私たちは、今なお続く戦争や暴力の苦しみを背負うすべての人々、とりわけ社会の中で最も疎外された弱い立場に置かれた人々に、心からの祈りを捧げ、揺るぎない連帯を表明します。私たちは、子どもたちを中心とした平和な世界を築くために、未来を見据えた行動をとらなければならないことを認識しています。私たちは、生命の神聖さ、人間の尊厳、そして「共有される聖なる繁栄（Shared Sacred Flourishing）」追求を基盤とした平和の文化を築くべく、信仰の垣根を越えて祈りと具体的な行動をもって、この和平プロセスを通じて力を合わせていく決意を、改めてここに表明します。